

種名	コ ウ ホ ネ				
	Nupbar japonicum				
					
分類	被子植物双子葉離弁花類スイレン科	俗称	カワホネ(川骨)	生活型	多年草、抽水植物
分布	北海道、本州、四国、九州、朝鮮半島、サハリンの各地に分布する。沖縄にも見られるが、少ない。				
形態	根：根茎は径2～6 cm、白色のやや堅い海綿質で、泥中を横走り、直角に分枝しながら縦横に交叉する。節から太い白色のひげ根を出す。新旧の根茎は2年で交替する。根茎の形状から「川骨」とよばれている。 葉：5月頃、根茎の頂部から水中葉と浮葉を出し、やがて気中葉を根生する。水中葉は淡緑色、膜質で柔らかく、葉身は長さ15～30 cm、幅5～15 cmの楕円形で、縁はアオサに似て波状に縮む。葉柄は短い。 浮葉と気中葉は長楕円形で鋸葉はなく、基部は深く切れ込み、長さ20～30 cm、幅7～12 cm。表面は濃緑色で光沢があり、裏面は淡黄緑色で中央脈に沿って細毛が密生し、支脈が目立ち、光沢はない。気中葉はかなり肉厚で柔らかい。若葉は葉巻状態で成長するにつれて開く。 花：花期は6～10月。葉腋より長く直立した円柱形の花茎を水上に抽出し、径1～2 cmの球状の蕾をつける。花は全開すると径4～7 cmになる。黄色に萼片が5～6枚あり、花びら状に見える。花弁は多数あり、長方形で外側に曲がる。 果実：果実は緑色の漿果で、長さ約6 cm、幅約4 cmの洋梨型であり、水中で結実した後、縦に裂ける。果実内には長さ5.5 mm、紡錘形で白色膜質の粘液を含む仮種皮が十数個あり、水面に放出されて移動するが、仮種皮が腐ると中から種子が出る。				
類似種	ヒメコウホネは、本州と四国の一部の池沼、溜め池、小川、水湿地などの水深1 m以浅の水中に群生する多年生浮葉植物で、全草はコウホネより小さい。葉身はコウホネよりは小型で丸みを帯びている。また、花も小さい。通常、気中葉は出さないが、渇水時には出すことがある。他に、オグラコウホネ、ネムロコウホネ、オゼコウホネなどの近似類があるが、分布地が偏っている。オグラコウホネは近畿地方と熊本・鹿児島両県の一部にわずかに分布、ネムロコウホネは北海道北東部から千島・サハリン・カムチャッカ・シベリア・北欧にかけて分布する。オゼコウホネはネムロコウホネの変種で、尾瀬が原、月山の弥陀ヶ池、北海道北部のキマモ沼などに見られる。				
生息場所	各地の池沼、溜め池、旧河道などの水深1～2 mの水域に生育する。				
繁殖	種子または根茎(地下茎)で越冬し、繁殖する。花期は7～10月で、結果して漿果を作る。根茎は地中を横走り、直角に分枝しながら増え、頂部から発芽する。				
他生物との関係	コウホネ、ジュンサイ、ヒルムシロなどの浮葉植物が繁茂する池沼には、エゾアオイトトンボ、アオイトトンボなどの幼虫が生息する。類似種のヒメコホネの葉はマダラミズメイガ、ミドロミズメイガの幼虫の食草となる。				
配慮のポイント	大型抽水植物は魚類の産卵や避難の場として利用されるので、生育場所を保護する必要がある。				
トピック	根茎にアルカロイドのヌハリジンを含み、漢方では強壮・止血剤として利用される。種子は食用となる。				
その他					
引用文献：『川の生物図鑑』を改変					